三題噺集

森野　熊

コントラバス・シンドローム（題：『作曲家』『影』『風呂』）

　コントラバスほど花の無い楽器はないのではないかと、僕はつくづく思う。見た目はバイオリンそっくりなのに、僕の身長と同じくらい高く、腕で支えつつ構えなければならない。そしてコントラバスにもバイオリンのように弓もあるのに、うちのジャズバンドにおいては弓を使うことはない。すべての曲で、指で弦をはじいて奏す。コントラバスを始めて間が無い僕が使えば間違いなく合奏が破たんするから、というのが弓を使わない理由だった。
　そう、うちのジャズバンドにおいては、コントラバスはアコースティックギターでアルペジオを弾くように演奏するのだ。といっても弦自体が太く、音階の間隔も広いせいでギターのように素早く弾くことはできない。コントラバスの弦は、一番高い音がでるＧ線はやや細いためバイオリンの名残が見えなくもないが、一番低いＥ線にもなるとまるでちゃんぽんの麺のような太さになっている。弾けばバスと冠するにふさわしく、その音色は低く陰鬱だ。
　ジャズバンドなんて、最初から入らなければよかったんだ。僕はときどきそう思う。
　クラシックにおいては『Ｇ線上のアリア』のような弦楽器主体の曲や、コントラバスだけで演奏する四重奏なんかもあったりするけど、これらは弓で演奏する曲がほとんどだ。うちのジャズバンドの場合、弓はせいぜいチューニングに使う程度。それにコントラバスは影が薄い。グレンミラーの『茶色の小瓶』や『スタンド・バイ・ミー』なんかはコントラバスが印象に残る曲かもしれないが、僕はその程度しか知らない。しかもそれすらも主旋律を演奏しているわけではない。スタンド・バイ・ミーに至っては同じ旋律を延々と繰り返すわけで、初心者コントラバス奏者でも手軽に演奏ができる反面、一歩間違えれば拷問にも近い曲となる。
　つまり、コントラバスは少なくともジャズにおいては『花が無い』楽器代表格と言っても過言ではないわけだ。
　そんなコントラバスを嫌々ながらもやり続け、すでに一年が経っている。週に三日、一日三時間の練習で、中指と薬指の先にはタコもできてしまっている。タコができるまでは毎日のように血豆ができ、それが破れ、風呂に入るたびに痛い思いをしていた。絆創膏を張ったり包帯を巻いたりして応急手当をしても、演奏を始めるとすぐにほどけ、また血豆ができる。その繰り返しだった。だがそのレベルを過ぎると血豆は硬化しはじめ、徐々にタコへと変貌していく。だからこのタコはコントラバス弾きの勲章とも言え、同時にコントラバスを弾くための自分専用ピックとも言えるものでもあるのだ。
――それでも僕はもっと花のある楽器がやりたい。
　別に目立ちたいとかいうわけじゃない。むしろ目立つかどうかで言えば、初見でこれほど人をひきつける楽器はないだろう。大きさもさることながら、ビオラやチェロといった他のバイオリン属のようには弓を使わず、楽器を立てて指で弾くという奏法。加えて、さんざんこきおろしておいて言うのもあれだが、ジャズにおいてコントラバスはかっこいいと思う。立ってコントラバスを構えているだけでジャズっぽさを醸し出すその存在感。目立ちたがり屋ならこれだけで十分ではないだろうか。
　でもそれは演奏に花があるわけではないし、僕は目立ちたいわけでもないのだ。単純に『飽

きた』というのが正解なのだろう。指で弾いたところで発せられる音は低く鈍く、暗い音しかでこない。大きいから家に持ち帰って練習することもできない。コントラバス担当は僕一人だから練習ももちろん一人きり。孤独感たるや相当なものだ。そして何より、主旋律を奏でて楽しむことができないというのが僕がコントラバスを嫌いな一番の理由だ。

以前、ジャズバンド部の顧問の先生に担当楽器の変更を頼んでみたことがあった。しかし先生は、他にコントラバスを持てるほど身長のある人がいないこと、唇が小さいからフルートは無理、唇が薄いからトランペットなどの管楽器も無理、サックスもドラムももう空いている楽器がない、などと言われけんもほろろだった。

それ以外で空いている楽器と言えば、ファゴットとピアノといったところだが、ファゴットはジャズではあまり使わないから大抵誰かが他の楽器と兼務しているし、僕はピアノは全く弾けない。

楽器を持ち込めばできるかもしれないが、サックスなんて一番安いソプラノサックスですら一本で十数万はする。もっと安いものもあるにはあるが、他のサックスと比べて極端に質が悪いものを選べばそれは音色に直結する。だから安物を選ぶわけにはいかない。そして仮にそうやって手に入れたところでピアノ同様、全くのずぶの素人であることにはかわりない。実用レベルになるまでに今から一年かかるとなれば、もう受験突入でジャズどころじゃなくなる。

だからつまり、選択の余地がないのだ。

「いいじゃない、弦楽器担当はあなた一人しかいないのよ。あなたにしかできないことがあるってうらやましい。私のやってるテナーサックスなんて、五人いるうちの一人でしかないのよ」

ひとつ上のバンドマスターをやっている先輩はこんなことを言ってくれたりもした。でも主旋律を演奏できない気持ちはきっとわからない。コントラバスでできる事はひたすら低い音で、ボン、ボンと指で弦を弾いて鳴らすことだけ。『メロディ』というものが無い。その辛さ、先輩にはきっとわからない。

「個人練習でひたすら伴奏だけやるのはつまらないですよ」

そのとき僕はこう答えた。

コントラバスは他の楽器を使っている人のそばでは練習できない。他の人が練習しているときに紛れ込むと、その重低音がテンポを崩してしまうらしい。自分の弾く音もうまく聞き取れなかったりすることがある。他の人が近くで練習していると、それだけでチューニングに失敗することさえある。

だから自主練習はもっぱら、音楽室の隣にある視聴覚教室。ここなら音楽室同様の防音設備が整っているし、他の誰の邪魔もしない。そして部屋に閉じこもって、一人で低い音をかき鳴らせば、だんだんと気分が暗くなってくる。なんでこんなつまらない楽器やってるんだろう。別に自分なんていなくてもいいんじゃないか。そんな考えが頭の中を堂々巡りする。

だから僕はもう、ジャズ部をやめようと思う。合奏中は楽しいのは認める。自分の弾く音が他の人たちの奏でる主旋律と交わりあい、それはそれは美しいハーモニーへと昇華する。でもきっと、コントラバスは無くてもいい存在。いや、ベースの低音はジャズには必要だけど、それはシンセサイザーやエレキギターでも代用できる。コントラバスでなくてはならない理由は無い。

僕がやらなきゃいけないわけでもない。
　憂鬱な気分で弾き続けていると、突然視聴覚教室の入り口が開いた。
「お昼ごはんの時間だよー。食堂いくよー」
　先輩が呼びにきてくれたようだった。気づけばもう正午を回っていた。つまらないつまらないと思いながらも、練習中は時間が経つのを忘れてしまう。やはり僕は音楽が好きなのだろうか。
「わかりました」
　先輩が部屋の中へ入ってきた。鉄の重たい扉がバタンと大きな音を立てて閉まる。
「……どしたの？　元気ないなぁ」
　僕の辛気臭い表情を見抜いたのだろうか。だとしたら都合がいい。今がそのタイミングということなのだろう。
「先輩……ジャズ部、辞めようと思います」
「えっ、いきなりどうしたの」
　先輩は目を丸くした。たった一年間とはいえ、なんとかやってきた僕が辞めるなんて言い出したのだから、驚かないわけはないだろう。
「以前も言いましたが、やっぱり僕はもっと主旋律のパートをやりたかったんです。コントラバスは、はっきりいってつまらないです。ジシュレンも全然面白くありません。トランペットとかサックスとか、もっと花のある楽器がやりたいんですが、ここではできそうにありません。だから辞めます」
　いきなりこんな告白されても先輩も困るだろう。でもこれが本音だ。次に先輩は、他にコントラバスをする人がいないからとか何とか言って僕を引き止めるだろう。でも、だから僕の気持ちを無視していいということにはならない。元々それほど乗り気でない人にやらせたことが間違いだったってことだ。できる人がいないなら、いないなりの編曲をするべきなのだ。そういう編曲ができなければ、できる作曲家なり編曲者なりを用意すべきなのだ。
「そっか……ごめんね、今まで無理矢理させてたんだね」
「あ、えっと……ええ、まあ」
　意外な言葉に戸惑ったが、僕は正直に答えた。
「でもね」先輩は教室の扉を閉め、僕の方へ近寄る。「コントラバスに花が無いってのは違うと思うよ」
「……あの、先輩、顔が近いです」
　先輩の長い髪がたなびくたびにシャンプーのいい香りがふわりと漂ってくる。こんなに女性に近寄られることは滅多にないから、普段から良く喋っている先輩だけれど、なぜか焦る。そんな僕をよそに先輩は話を続ける。
「君はコントラバスを表舞台に出てこない、日影の楽器みたいに言ってるけど、そうじゃないよ。コントラバスが影の役者だと言うのならたしかにそうかもしれないけど、でもね、光があるから影ができるんじゃないの。影があるから光は輝くことができるの。わかる？」
「は、はぁ……」
　先輩はなんだか理論的なようで実はそうでもないような、よくわからないことをまくし立てる

ように喋る。
「地球にだって夜という影があるから、適度な温度で今こうして快適に過ごせているわけじゃない。影がないと成り立たない世界というものは確実に存在してるのよ」
「その影が僕じゃないといけない理由はありますか？」
「まあ、あなたがジャズ部を辞めたら、誰かがあなたの代わりにコントラバスをやるだけでしょうね。でもね、困るの」
　二ヵ月後にはコンクールが控えているし、確かに今やめるのは困るだろう。今から全くの素人をコントラバスにつかせても失敗するのは目に見えている。
「わかりました、じゃあコンクールまでは部活を続けます。そのあとはシンセで……」
「違うの！」
　先輩は叫んだ。僕はここが視聴覚教室で良かったと思った。外に声は絶対に漏れることはない。僕が二ヵ月後に辞めるなんて話が広まったら、きっと他のメンバーにも動揺が広まってしまう。
「違うって何が違うんですか」
「私はあなたと一緒に演奏がしたいと言っているの。一人で練習するのがつまらないなら、私が一緒に練習してあげる」
「そりゃ一緒に練習してくれれば少しは面白いかもしれませんが、先輩はバンマスじゃないですか。ずっとそればっかりやってるわけにもいきませんし、一緒にやるにしたって結局はジシュレンだって必要でしょう？」
「どうしてそうなるかな……そうじゃなくて、私は部活のために残って欲しいって言ってるわけじゃないの。私のために残ってほしいって言ってるのよ」
　ああ、そうか。折角バンドマスターとして部員をまとめてるのに、途中で部員が辞めたりしたら評価が下がるということなのだろう。バンドマスターは次期部長候補とも言われているみたいだし、評価が下がれば他の部員に部長の座を取られるかもしれない。逆にもし部長になれれば、内申でも好印象となるに違いない。
「しょうがないですね、じゃあ来年の春までで……」
「ほんと、君はにぶいなぁ……」先輩は頭を抱えた。「ねえ、好きな子とかいるの？」
「へ？　いませんけど、いきなり何なんですか」
「私はあなたが弦を弾くその指がすごく好きなの。正直ずっと見ていたい。けど私はバンマスだしサックス担当だから、仕方なく合奏に混ざってる。だけど本当はあなたと二人きりで演奏したいの。ここまで言ったらわかるでしょ！」
　先輩は顔を耳まで真っ赤にして叫んだ。ああ、そういうことですか。ようやく僕にもわかりました。
「あの……うれしいです」
「そう！　それよそれ！　それが正しい反応！　理解できたならよろしい……てかここまで言わなきゃ君はわからないの」
　先輩、これは告白と受け取って良いのでしょうか。

「まあいいわ、とりあえず食堂いこうか」
　先輩は満面の笑みで僕の手をとる。
　僕は壁の時計を見て、まだ三十分しか経っていないことを知った。コントラバスはつまらない楽器だと思ってたし、いや、今もまだそう思ってる。けど、僕を、僕が弾くコントラバスを、たったひとりでも必要だと言ってくれる人がいるなら、それだけで僕はやっていけそうな気がする。好きと言われてほいほいと心が変わるのは気に入らないけど、でもこんな理由なら悪くはない気がする。もう少しだけがんばってみよう。先輩は確実に僕という『影』を見てくれているのだから。
「私はバンマスだから音楽室からあまり離れるわけにいはいかないけど、せめてジシュレンの時間くらいは私と一緒に……」
「一緒にハーモニーを、とか恥ずかしいこと言わないでくださいよ」
「バ、バカ！　そんなこと言うわけ……」
「僕だって照れるんです」
　そして僕は先輩の手をぎゅっと握り返した。

カシャ茶を飲み終わったら（題：『旅人』『髪飾り』『物置』）

　誰だい、こんな夜中にお客さんかね。
　おや、あんたか。雨熊が泣き喚いてるようなときに、よく来たね。どうしたんだい、ずぶ濡れじゃないか。まあいいさ、お入り。暖かいカシャ茶でも淹れてあげようさね。
　ああ、靴はそこで脱いでおくれ。絨毯は昨日新調したばかりだからね。こうも歳を取ると掃除一つ大変でね。汚れて破れてどうしようもなくなったときに換えるようにしてるのさ。
　さあ、コートも脱いでおしまい。暖炉の前に掲げときゃ何、すぐ乾くだろうよ。ちょいと、そこにある茶色のビンを取ってくれるくれるかね。そう、それだ、ありがとうよ。
　あんたは若いわりには素直だね。今時珍しいもんだ。
　腹は減ってないかえ？　ちょっとしっけてるが、このクッキーでもつまむといい。苔胡桃の実が入ってて香ばしいよ。
　ふふ、その遠慮のなさもいいね。最近の者はなんにでも気兼ねしすぎるんだよ。
　あっはっは、いいんだよ、あたしなんかに気を使わんでおくれ。あとは死ぬことしか残されてないようなばばぁになんぞ、使う気がもったいないってもんだ。
　今度はそこのカップを取ってくれるかい。二つだよ。ああ、そこに置いておくれ。
　あんた、本物のカシャ茶を飲んだ事はあるかい。
　そりゃそうだろうね。あんたみたいな若造がおいそれと手に入れられるようなものじゃないからね。ほら、嗅いでみな。どうだい、良い香りだろう？　このカシャ茶はハランド高原でしか取れない特別なものなのさ。そこいらで売ってる雑草みたいな茶葉とはわけがちがう。
　さあ、離れておくれ。お湯が跳ねるとあついよ。お湯の量はね、カップの内側のこの線までがいいんだよ。ちがうちがう、これはあたしの好みってだけさ。薄めが好きならそうすればいい。あたしゃ濃いのが好きだからね、これくらいのお湯しかいれないのさ。
　よしよしこんなもんだろう。あとはソーサーで蓋をしてしばらく待てば良い。
　こらこら、置いてある物に勝手に触るんじゃないよ。危ないったらありゃしない。そりゃね、ここは物置みたいであんたには珍しいものもいっぱいあるだろうさ。だが魅了されちゃいけないよ。何しろどれもこれも並大抵の魔力じゃないからね。触りたくなるのもわからないでもないけどね、あんたみたいな若造が下手に邪気に触れたりでもしたら、あたしにだってどうしようもないからね。だからこそここに置いてるんだ。
　そろそろかね。ちょいとおまち、もっと顔を近づけてから蓋を取るんだ。一番香りを感じられるからね。
　さあ、そっと蓋をあけてごらん。どうだい？　あっはっは、やっぱりあんたにはちょっと早かったかね。まああんたも歳を取ればその良さがわかるってもんさね。
　さ、香りを存分に楽しんだら次はミルクを入れるんだ。カシャ茶はミルクティーのための茶葉だからね。
　砂糖はどうするかい？　ああ、好きなだけ入れるといい。体が冷えてるだろうから、ブランデーも一滴いれてあげよう。温まるよ。

さあ、少しずつ啜りながら飲んでごらん。
どうだい。そうかそうか、気に入ったならそれでいい。苔胡桃のクッキーとも良く合うだろう？　あたしゃそれをカシャ茶に浸しながら食べるのが好きなのさ。
ああ、そうやってひたひたにしてから食べてごらん。そうかいそうかい、気にいったなら何よりだ。
そうそう、あんたが来たら渡そうと思ってたもんがあるんだ。ちょいとお待ちよ。えー、確かここに置いたんだがね……あったあった。これさ。綺麗だろう？　石榴石の髪飾りさ。
付けてごらん。ああ、よく似合ってるね。
こいつはねぇ、また格別の魔力を宿しているんだよ。この石はカーバンクルという、ここいらじゃ滅多に見かけない動物の額についている石なのさ。幸運を呼ぶ魔力が存分に備わっている。
さ、これを持っていくがいい。
おやおや、なんだい急に涙なんか流して。女々しいね。
ああ、わかってるさね。だからこれを渡したんじゃないか。今度の旅はまた長くなるんだろう？　だけどあたしの占いじゃね、あんたは必ずその目的を成し遂げると出てる。だから、必ず戻っておいで。またおいしいカシャ茶をごちそうしようじゃないか。あんたの武勇伝を、苔胡桃のクッキーを食べながら聞いてやろうじゃないか。
あたしゃここからずっと、あんたとあんたの仲間たちを見守っているからね。さ、茶を飲み終わったらさっさとお行き。あまり長くは持たないが、雨に濡れない魔法くらいかけてやろうじゃないか。
いいかい、絶対に死ぬんじゃないよ。
あたしはずっと、あんたを待ってるからね。

先生、お元気ですか。（題：『教師』『鉢巻』『聖地』）

　せんせい、お元気ですか。ぼくは元気です。
　今、ぼくは北のしまに来ています。ここはとてもあたたかいところです。まわりは海なので、およぐこともできます。せんせいやみんながいたアルサージュよりも木やどうぶつがいっぱいです。ぼくは今、けんのべんきょうをしています。せんせいはこわいけど、つよくなるとうれしいです。また手がみをかきます。

　☆

　先生、お元気ですか。ぼくは元気です。
　今日からぼくは中級クラスに入ることになりました。剣を使うのがうまくなったからです。友達の中では一番ぼくが上手です。上手といっても、先生にはかないません。先生というのはリード先生のことではありません。剣の先生です。少しでも失敗するとすぐに怒るので嫌いです。先生みたいに笑ったりもしないので、ちょっと怖いです。また手紙を書きます。

　☆

　先生、お元気ですか。僕は元気です。
　前回からだいぶ経ってしまいましたが、僕は今日から上級クラスに進むことになりました。つまり、士官候補生になったということです。でも先生はきっと喜んではくれないのでしょうね。僕が修道院を出るときに見た先生の悲しげな顔を今でも思いだします。
　そうそう、修道院を出るときに先生が卒院生全員に配ってくださった、シリアルナンバーの書いてある鉢巻、僕は今でも持っていますよ。僕は今はこれを剣の柄に巻いて、修道院で過ごした日々を思い出しながら鍛錬に励んでいます。相変わらず教師たちは性格が悪くて、しごきに耐えられなかった同窓の何人かが既に脱落しています。最初は数十人いたのに、今この上級クラスに残っているのはたったの三人になってしまいました。
　僕も何度かくじけそうになりましたが、その時にいつもこの鉢巻を見ています。そして思いだすのは先生の笑顔でした。先生が僕の頭をなでながら送りだしてくれたことを、今でも昨日のことのように思いだします。
　いつかご挨拶に行ければいいなと思っています。それではまた。

　☆

　先生、お元気ですか。私は元気です。
　いよいよ明日、私はこの鍛錬所を卒業することとなりました。きっと明日の午後には聖地ミシルに着いていることでしょう。私は剣術の成績が非常に良かったらしく、ひとつの分隊を任され

ることになりました。本隊の士官として着任するのはしばらく後のことになりそうですが、戦場で実際に兵を指揮することは初めてです。私の下につく隊員も皆、戦場は初めてだと聞きました。彼らを死なせないように尽力したいと思います。
　もっと色々と書きたかったのですが、残念ながら時間がありません。次は手紙ではなく、戦勝報告をしに修道院へ行ければと思っています。それではお元気で。

☆

　先生、私はもう帰ることはできません。今、聖地にいます。さきほど、左腕を爆風で失いました。先生からもらった鉢巻で止血をしていますが、血が止まりそうにありません。敵はすでに目の前の鉄扉まで来ています。シェルターは長くはもたないでしょう。部隊員たちと連絡もつきません。彼らの安否だけが心配です。彼らには本当に申し訳ないことをしました。私がここで死ぬことで、少しは贖罪となるのでしょうか。
　私にとって、先生と過ごした日々こそが最も幸福な時間でした。それだけを伝えたくて、この手紙を書いています。どうか、この手紙が先生に届き

◆　◆　◆

　男は最後の手紙を引き裂くと、それを近くの燭台にくべた。
「リード兄弟、よかったのですか？　それはあの子からの手紙だったのでしょう？」
　奥から修道女が声をかけてきた。
「ああ。だが俺たちからしてみれば、ほんの一日、一緒に過ごしただけの子供だからな。何の情もない。お前もいい加減、慣れろ」
「ええ、まあ、十数年もやってることですから気にはしてませんけど」
　リードと修道女は目を下に落とした。十字架のたもとに置かれた簡素な木棺の中には、左腕がない裸の男性の遺体が横たわっている。装束も着せられず、もちろん死化粧も施されず。花一本供えられない匣の中に、全身に深い傷がついた体だけが無造作に置かれている。
「やっぱり防具どころか服も与えられないんだな。予算は削れるだけ削るってことか」
　横たえられた男のちぎれた腕には血でどす黒く汚れた布が巻き付いていた。これだけが唯一、『纏っている』と言ってもよい布だった。
「しかしいくら繰り返しても、やはりこれにだけは慣れませんわ。この兵士にだけは。だって、先週ここに来た時はまだ赤ん坊だったのに、たった一週間でここまで成長してしまうなんて。ただ……」修道女はそっと目を伏せた。「いくらこれが『人の子』が人を殺さずに戦争を行える唯一の方法だと言われましても、わたくしにはどうしてもこの方法は受け入れられませんわ」
「俺にだってわかんねぇよ……こうまでして聖地を奪い返す意味があんのか」
　そう言うとリードは遺体から目をそらした。
　窓に目をやると、朝から降り続いていた小雨がさらにひどくなっていた。

「それにしても手紙を送ってくるだなんて、初めてのことです。やっぱり修道士長様へ報告なさったほうがよろしいのではありませんか？　こんなイレギュラーなことが上に知られたら大変なことになるのではございません？」
「気にすることはない。他の子に比べてちょっと特異だったというだけだ。死んでしまえば同じ。兵士としては無能だったってことに変わりはない」
「しかしわざわざ処分場まで行ってこの子を引き取りたいだなんて言い出したのも、リード兄弟ではありませんか。今まで一度もそんなことおっしゃらなかったのに」
「ああ……そうだな。なんでだろうな」
　雨が一層激しくなってきた。大きな雫が教会のひさしを伝って定期的に垂れ落ち、アレグロのリズムを刻む。下にできた水たまりはまた地面を浅く掘り返し、錆色に濁った水をたたえているのだろう。
「なあ……俺らとこいつら、どっちのほうが神の国に行く資格があるんだろうな？」
「リード……兄弟……」
　リードは遺体の左腕に巻きついている臙脂色の細い布を取り外し、ポケットから同じくらいの長さの真っ白な布を取り出した。そして、それを遺体の右腕にそっと巻きつけた。
「それは……」
　修道女の問いにリードは何も答えず、簡素な棺の蓋を黙って閉じた。
　棺の中には、まだ子供らしさが残る男の遺体と、数字の書かれていない純白の鉢巻だけが残された。

卑しき老婆の受難（題：『兵隊』『歯車』『海岸』）

　今度はこっちの人にかい？　ええ、何度でも説明してやるよ。あたしみたいな老いぼれにはいくらでも時間があるからねぇ。それよりも情報提供者に支払われる報奨金のことは忘れないでおくれよ。それをくれるって言うからあたしゃ説明してやってんだからね。じゃあ準備はいいかい。説明を始めるよ。
　それは私が海岸を散歩していたときのことさ。ああ、もちろん一人だよ。連れ添った人はもう十年も前におっちんだからねぇ。おっといけないいけない、この歳になると古いことばかり思い出しちまう。
　そんでだよ、海岸に流れ着いたビンなんかを拾ってたときのことさ。後ろの雑木林から突然、大声で何かをわめきながら、男が一人こっちに走ってきたんだよ。そいつは兵隊の恰好しててね、銃はもってなかったんだけどあたしゃもう怖くってねぇ。ヒィなんて声をあげながら必死で逃げたんです。
　でもこんな年寄りが逃げたって逃げ切れるもんじゃない。砂に足をとられてすぐ追いつかれちまった。そしたらね、お役人さん、その兵隊があたしに乗っかってきて首を絞めようとしてきたんですよ。その間も意味のわからない奇声をあげっぱなし。
　あたしゃ怖くってねぇ。兵隊さんの手が首にかからないように一生懸命はねのけて抵抗してたんですよ。そしたら偶然、手元にビンか何か、固いものが当たってね、それをつかんでえいやと兵隊の頭に叩きつけてやったのさ。そしたらその兵隊、ぱったりと倒れちまった。老いぼれの一撃で伸びちまうなんて、今どきの兵隊はだらしないねぇなんて思ってたらね、その兵隊、突然頭から煙がでてきたのさ。
　そこであたしゃピーンときたね。ほら、ちまたで流行ってるあれだよ、殺人アンドロイド。テレビのワイドショーなんかで今にぎわってるだろう？　見た目が人間そっくりで、壊してみるまで人間かアンドロイドかがわからないってやつ。ほら、これが証拠さ。殴ってやったときにこの歯車が落ちたから、念のため拾ってきておいたんだ。
　おっと、触らないでおくれよ。こいつはあとでマスコミに高く売るんだから。ん？　ああ、そうかいそうかい、買い取ってくれるってんならもちろんあんたらに譲るさ。ああ、もちろんだとも。このことはまだ誰にも言ってない。もともとマスコミに売るつもりでいたからねぇ。ひとに言ったら価値が下がっちまう。安心しな。
　しかし怖いねぇ。なんでも、政府の人間に成りすまして偉い人の命を狙ってるってんだろう？
　しかも兵隊にまで紛れ込んでるってことは日本の軍事関係にまで入り込んでる可能性があるってことじゃないかねぇ。まったく、怖いねぇ。一体誰を信じればいいんだろうね。まさかあんたらもアンドロイドってこたぁないだろうねぇ？　あは……は、や、やだね、今言ったことは全部冗談さ。報奨金目当ての嘘だよ。だから、ね、手を放しておくれ。あ、あたしゃ何も見てないから、やめておくれ、後生だから……ひゃ、ひゃー！

黄金の舌で会いましょう（題：『芸術家』　『舌』　『木の上』）

　昨夜飲みすぎて遅くまで寝ていたアリーの耳に、唐突に軽快な音楽が流れてきた。そう、いよいよ今日はキリスの旅立ちの日だ。
　二日酔いに痛む頭を押さえてようやく寝床からでると、アリーは持っている服の中で最もお気に入りの服を手に取った。別れの時にはふさわしくない、黄色の花びらをあしらったカジュアルな服だ。旅立ちを悲しいものにしないためのせめてもの気遣いのつもりだった。
　広場に出るとキリスが中央の広場で得意のバイオリンを演奏していた。彼の奏でる音は多彩で繊細で、アリーの村にある三音しかならない笛とは表現力があま りにも違っている。生まれてから一度もこの村を出たことのないアリーにとって、キリスの奏でるバイオリンは奇跡のようなものだった。
　キリスの周囲にはすでに村の者たちが集まり、立ったまま彼の演奏に聞き入っている。アリーもその中に混じる。
　しばらくして最後の演奏を終えると、キリスは拍手喝采に包まれた。アリーも手が折れるんじゃないかと思うほど強く拍手した。これで最後だ。今日でお別れ。そう思うと涙が溢れそうになるが、ぐっとこらえて手を叩く。
「やあ、アリー。昨晩の送迎会、ありがとう。楽しかったよ。君が企画してくれたんだってね？」
「おはようございます、キリスさん。楽しんでいただけたのなら幸いです。キリスさんの演奏も大変素晴らしいものでした」
　アリーは平然を装い、形式的な挨拶をする。
「そうだアリー、今日私は旅立つが、ひとつ頼まれてくれないかな？」
「え？　ええ、なんでしょう？」
「これを預かっててくれ」そう言うとキリスはアリーに、手に持っていたバイオリンを渡した。
「私はここにまた戻ってくる。だから、その時まで君がそれを預かっていてくれないだろうか」
「キリスさん……」
　アリーにとってはコントラバスのような大きさのバイオリン。すると突然、アリーの目から涙があふれだした。
「アリー、どうか泣かないでおくれ。私だってここを離れたくはないんだ。こんなに素晴らしい村を私は他に知らない。だがアリー、君が泣いていると君やみんなと離れるのが辛くなってしまう。だから頼むよ、涙で私を引き留めないでくれたまえ」
　キリスはアリーの涙を指でそっとすくった。
「ええ、ごめんなさい、ごめんなさい。でも、止まらないの。お願いです、もう一度考え直していただけませんか？」
「すまないね、アリー。でももう決めたことなんだ。私はただ君たちに礼がしたいだけなのだよ。今私がこうしていられるのは君たちのおかげだからね。あの伝説の木の上にあるという『黄金の舌』があれば、君たちはこれから数年先まで働かずに過ごせるのだろう？」

「ええ……でもキリスさん、私たちはけっして楽をしたいとは思っていません。慎ましく、堅実に生きていくことを望んでいます」
「でも私ならあそこまで二日で行って帰ってこれる。君たちとは体格も違うから、一度にたくさん持ってかえることができる。だから私が行くべきなんだ。…… すまないね、きっとこれは私の性分なのだろう。楽できる方法をつい選んでしまう。だから死に掛けて君たちに命を救ってもらうハメになったのだろうけどね。 でもだからこそ、命の恩人である皆さんに恩返しをしたいんだ。これくらいのことをしないととても恩を返しきれないよ」
　そういうとキリスはアリーの涙を指でぬぐった。
「キリスさん……」
「アリー、それと村の皆さん。勝手ながら私は今日ここを旅立ち、あの伝説の木へ向かいます。そしてきっと黄金の舌を持ち帰ります。必ず戻ってきます。なのでしばしのお別れです。皆さん、今まで本当にお世話になりました」
　そういうとキリスはアリーたちに深々と礼をした。
「キリスさん、どうぞ、どうぞ頭をあげてください。私たちこそ感謝を申し上げなくてはなりません。ただ耐え忍ぶだけの冬に、これほど心温まったことはあり ません。キリスさんのおかげで、今冬は大変楽しく過ごせました。ですから、お礼なんて本当に結構ですから、どうかあの木に登るのはおやめください」
「アリー、気遣いに感謝するよ。それでは皆さん、お元気で。アリー、そのバイオリンは大事にしまっておいてくれたまえよ。それではこれで失礼する。どうか、再びここに戻ってこれるよう祈っていてくれたまえ」
　そういうとキリスは羽根を広げ、飛び立った。
「キリスさん……待ってますから！」
　しかしキリスが振り返ることはなかった。

　キリスが旅立ってから数ヶ月が経ち、再び冬が訪れ、その冬も終わったがキリスはまだ戻ってこなかった。
「アリー、考え直すんだ。もうキリス殿は死んでいる。無謀なことはやめなさい」
「お父様……わかってます。でもごめんなさい、私はどうしてもキリスさんに会いたいの。会わなくちゃいけないの。例え彼が死んでいたとしても、私はその最後を知りたいのです」
「お前の気持ちはわからんでもないが、だからと言って伝説の木に向かうなんて……ましてお前は女王になる身だというのに！」
「分かってるわ……でもごめんなさい、女王の代わりなんていくらでもいます。だからお父様、お願いです、引き止めないでください」
　アリーは父の顔をまっすぐ見つめた。
「村の男連中ですら帰ってきた者はいないんじゃぞ！」
「ええ、ですから今日でお父様ともお別れです。私もきっと戻ってくることはできないでしょう

。でも、私は行きます。これが私の見つけた答えなのです」
「アリー！」
　アリーは駆け出した。キリスのバイオリンを背負って。アリーは父親の制止を振り切り、村の門を越えた。そこには明るくて眩しくて、それでいて暖かい光があった。それは、アリーが初めて見た太陽だった。

――それから数億年後。

「博士、珍しいものがありますよ」
　白衣を着た研究者が初老の男にカラメル色の石を手渡した。
「ふむ、これは琥珀じゃな。綺麗な黄金色をしておる」
「ええ、それと何かが中に閉じ込められているようなのですが……それはなんでしょう？」
「ほうほう……これはすでに地球上からは絶滅している『昆虫』と呼ばれる生物じゃな。樹脂に閉じ込められてそのまま琥珀になってしまったようじゃ。このように完璧な固体として残るとは珍しい」
「これが昆虫ですか……初めて見ました。なんかグロテスクな外見してますね」
「そうじゃな。昔はこういうのが百万種類、地球上には存在していたらしい。地球の大気変動で全滅してしまったがな」
「しゅ、種類だけで百万ですか……うげぇ」
「我々がこうして宇宙に住まざるを得なくなったのも、昆虫が全滅したからとも言われておるぞ。まあその全滅する原因を作ったのも人間じゃがの。しかし二匹同時にひとつの琥珀に閉じ込められているとは珍しいぞい」
「……あ、博士、その二匹の昆虫の名前がわかりました。今モニターに映しますね。左側のはアリと呼ばれる生物だそうで、大きい方はバッタの一種だそうです。アリの背中に妙な物がくっついているそうですが、そちらはまだ解析中だそうですよ」助手は手元の情報端末を手に取り読み上げた。
「ふむ、そうか。アリとバッタか」
　博士と呼ばれる男は琥珀をライトにかざした。
「ところで君、『アリとキリギリス』という伝承を知っているかね？」

十三回忌（題：『山頂』『先輩』『十三回目』）

　登山口で待っていると、遠くから児島先輩と香奈先輩が歩いてくるのが見えた。
　俺は無言で二人に手を振る。二人の表情は暗い。
「ひさしぶり……もうあれから十三年なんですね」
　俺のすぐそばまで来て、香奈先輩は言った。
「そうだね、早いもんだ。あのとき僕が中止を決めていれば……笹井はこんなことには……」
　児島先輩は立ち止まり、俯いてつぶやいた。
「児島先輩……」
「児島君、自分を責めないで……。あれは……いいえ、行きましょう」
　香奈先輩がそういうと俺たちは再び歩き出した。香奈先輩の登山用リュックには、花が縛り付けられている。
「あの日の突然の猛吹雪なんて誰にも予想できなかったんすよ……いや、冬山をなめてた俺が一番悪いんです。だから先輩、自分だけを責めないでください」
　俺は呻くように呟いた。
　この山は登山口が五合目にあり、冬でも雪さえ積もっていなければここまでは車で難なく登ってこれる。そのため家族連れにも人気の登山スポットとなっている。街が見下ろせ、時折雲海もかかる八合目の展望台は人気の観光スポットとなっている。
　しかし八合目以降からは途端にここは難攻不落の山と化す。特に九合目からは『阿修羅の相』と言われるほどに天候が変わりやすく、毎年のように山頂付近で命を落とす者がいた。
　わかっていた。わかっていたはずなのに、俺達は山を甘く見すぎていたんだ。
「十三回忌の今日が晴天でよかった。七回忌のときは結局中止したからな」
　児島先輩は前を見ながら言った。
「でも先輩……あの日も五合目は晴れてました。気を抜かないでくださいよ？」
「そうね……でも少しでも危険かもしれないって思ったらすぐに引き返しましょう」
「ああ……わかってるさ」
　それから俺達は黙々と道を登り続けた。八合目を過ぎたあたりでわき道にそれる。わき道を歩き出して小一時間ほどして、ようやく慰霊碑の場所に到着した。
　そう、ここが十二年前、俺達が遭難した場所だ。
「笹井君……また来たよ」
　香奈先輩がつぶやく。
　慰霊碑は石で囲ってはあるものの、上にはどっさりと枯葉が積もっている。児島先輩がそれらを手で払いのけた。
「香奈ちゃん、さあ、花を」
「ええ」
　香奈先輩はリュックを降ろし、括ってある花束の紐を解いた。包んでいた紙を取り除き、花だけを慰霊碑の前に置く。児島先輩はポケットから線香を取り出して火をつけ、線香立てにそれを

立てた。
「笹井君、私たちは君のおかげで今も元気にやってるよ」
　香奈先輩は手を合わせながら言った。
「そうそう、笹井、僕も今度結婚するんだぜ。知ってると思うけど、カヌー部だった川西奈緒。時々一緒に山昇ってたから、覚えてるだろう？」
「えっ、マジで！」
「私だって、次こそは子供を連れて……ってさすがにこんな危険な場所には、子供を連れてってわけにはいきませんね」
「はは、香奈ちゃんも今年こそはお母さんになれるかな？」
「でもよかった」
「やだもう児島君ったら」
「俺が死んだせいで二人がずっと幸せになることを負い目に感じるんじゃないかって、すっげー心配してたんすよ。児島先輩も、香奈先輩も、ちゃんと幸せになれそうですね」
「じゃ、笹井君、また来るからね。次は……十七回忌だから四年後になるけど、次もきっと来るからね」
「俺……ようやく成仏できそうっす」
「僕も笹井の分まで、しっかりと生きていくからな」
「はい！　一緒に生きていけないのは残念ですが、先輩たちが今幸せになれたのなら、俺は幸せです。先に行って待ってますから。ゆっくり来てください。土産話、楽しみにしてます」
　俺は笑顔で手を振り、二人を見送った。

バックベアードの棺（題：『チビ』『コレクション』『個室』）

――家政婦募集！　期間は二週間、実作業は一日四時間、日給三万円、衣食住完備で今日から始められます！

　家のポストにこんなチラシが入っていた。家政婦なのに三万円はかなり破格。でもなんで二週間だけなんだろう？
　いや、しかし今の私にはちょうどいい。私は今月、高校を卒業する。でも家が貧しいせいで大学にはいけない。なので私はしばらくアルバイトをするつもりでいた。お金を貯めてしばらく海外にでも行こうと、漠然と考えていた。
　しかし、実家では息が詰まる。三部屋しかないマンションで、両親と妹二人の五人で住むにはあまりにも狭すぎる。ゆえに私はある程度お金がたまったら近くにワンルームでも借りるつもりでいたので、このアルバイトはまさにうってつけとも言える。
　私は早速連絡先に電話をしてみた。
「あの、チラシを見たんですが……」
『あらあら、ありがとうございます。ようこそご連絡くださいました』
　電話に出たのは品の良さそうな女性だった。声の感じからして、初老程度の年齢だろうと思う。
「家政婦ってことは家事ですよね？　それで日給三万円ってかなり破格だと思うんですが、何か危険なことをしたりしないといけないんですか？」
　トラとかワニの世話とか。
『あら、そうなの？　ごめんなさい、お金の感覚があまりなくて。でも命の危険は全くございませんわ』
　女性は綺麗な言葉で語りかける。
「あの……チラシに書いてあった、『二週間、家から出られない』ってのと『外部と連絡取れない』ってのはどういう意味ですか？」
『そうね、宜しければ今からこちらへおいでなさらない？　詳しいことは会ってお話ししたいわ。住所はそのチラシに書いてありません？』
　確かに、チラシの下の方に小さく住所が書かれてあった。ここのすぐ近くだ。
「わかりました、では今からお伺いします。あ、でも履歴書とかまだ用意してないんですけど」
『結構ですよ。二週間ですし、連絡先とかこちらで書いていただきますので。そんなたいそうなお仕事ではございませんから、緊張なさらなくて構いませんわ』
「は、はぁ……」
　私は若干いぶかしく思いながらも、その住所を尋ねることにした。

　驚くほどの豪邸だった。というか、こんな家いままでここにあったかな？　時々ここの道は通ってたはずだけど、全く見覚えがない。新築でもなさそうだ。壁の汚れや蔦が絡んでる様子は、

新築というには古すぎる。
「ごめんくださーい」
　呼び鈴を鳴らすとしばらくして扉が勝手に開いた。
『いらっしゃい、お入りになって』
　先ほどの女性の声がインターホンから流れる。
「失礼しまーす……」
　丁寧に敷き詰められた石畳を踏み外さないように、私は家本体の方へと進む。
　木製の大きな扉のところまできくと、ガチャリと音を立てて扉が開いた。
「いらっしゃい」
　出てきたのは初老の、品の良さそうな女性だった。老婆というにはまだ若い。
「あ、はじめまして、えっと……」
「ひとまず中へお入りください」
「あ、はい、それじゃ失礼します」
　中へ入るとこれもまた豪勢な家具がたんまりと並んでいた。素人の私にもそれが高価な価値のあるものであることくらいはわかる。それほど『高いものだぞ臭』がプンプンとする。
「こちらの椅子にかけてお待ちになって。お飲み物はお紅茶でよろしいかしら？」
「あ、はい、お構いなく」
　私は言われた部屋へ入り、アンティークな椅子に腰かける。バイトの面接にきたはずなのに、なんだか接待されているようで落ち着かない。
　しばらくして女性が盆を手に戻ってきた。
「お待たせしました。家政婦の件よね？　まずお名前をお聞かせいただけるかしら」
　女性は盆に乗せた紅茶とクッキーとメモ用紙を私の前に置きながら話しかけてきた。
「はい、えー、栗原美奈江って言います。住所はここと同じ四丁目の……」
「あ、住所と連絡先はこちらの紙に書いていただけます？　あとお名前も」
「わかりました」
　私は紙に記入し、それを女性に差し出す。
「あら、私がまだ名乗っていませんでしたわね。杉江絵津子と申します。エツさんとでも呼んでいただければ結構ですわ」
　エツさんはにこやかに語った。
「わかりました、エツさん。今は家政婦さん、一人もいらっしゃらないんですか？　これくらいの大豪邸ならお手伝いさんとかもっといても不思議じゃないのに」
「大豪邸だなんて恥ずかしいわ。今は息子と一緒に住んでますの。今日は外出していて留守なんですけど、その息子がよその人を入れるのを嫌がってね……本当はもっと雇いたいのですけれど」
「そうなんですか……こんな大きな家だと掃除も大変ですね。私、下に二人の弟がいて、いつも家の手伝いをさせられてたのでよくわかります」
「苦労なさったのね。でもそれなら家事のほうは大丈夫そうね。私の夫なんかは五年前に亡くな

ったんですけどもね、本当に何にもしない人で……あらやだ、いけない、アルバイトの面接でしたのに」
「あ、ごめんなさい、私が変なこと聞いちゃったせいで。あの、具体的にどんなことをするんでしょうか？」
「ええ、やることは複雑なことはありませんわ。普通に家の掃除とお庭の水遣りと、お洗濯くらいかしら。お料理は私がやりますので結構ですよ。もっとも一人ではそこまで手が回らないと思いますけどね」
　私はうなずきながらメモをとった。
「お掃除とかも広いので一日で全部しなくて結構ですわ。四時間でできるところまでで構いません。あ、それと息子の部屋は掃除しなくていいわ」
「わかりました。で、外部と連絡を取れないって件についてですが……」
「ああ、それね。申し訳ないんだけど、息子は科学者でしてね、自分の研究の秘密が盗まれるんじゃないかっていつも疑ってるのよ。部屋は電子ロックがかかってそもそも私ですら入れないのよ」
　うわー、なんかややこしそうだ。
「で、しかも同じ人は二週間以上雇うなとか、情報を持ち出されないように外に出すなとか、いろいろ言ってきてて……それで二週間ごとに新しいお手伝いさんを雇わないといけないの」
「た、大変ですね……」
「それで、雇われていただけるかしら？」
「あ、はい、もちろんです」
　息子はちょっと危険な気もするが、エツさんは普通そうだし、まあなんとかなるかな？
「では早速ですけど、明日から来ていただけます？」
「わかりました、では明日からこちらで働かせて頂きます」
「じゃ、契約完了ね。二週間連絡取れなくなることを、ご両親とかお友達にちゃんと伝えてきてくださいね」
「わかりました」
　私は礼を言い、帰路へ着いた。部屋にテレビがあるとはいえ、きっとそれだけだと相当暇をもてあましそうだ。小説いっぱいもってこなきゃ。

　翌日、私は私服と着替えと何冊かの小説を詰め込んだ大き目の鞄をもって例の豪邸へとついた。
　到着するや否や待っていたわとエツさんから熱烈な歓迎を受け、私は早速家事を始めた。
『まずは洗濯からかな。ふんふん、奥から二番目のドアを開けると……あった、ここか』
　そこは脱衣場だった。男物の下着などが雑に脱ぎ捨ててある。
『これが言ってた、同居してる息子さんのね』
　お父さんや弟たちの下着もいつも洗ってたので、男性用下着だからといって今更きゃーきゃーいうような繊細さも私にはない。

　用意しておいたプラスチック製の籠に手早く詰め込み、洗濯室へと向かった。
　洗濯機はやや古い型のものだったが、それでもうちのよりは新しく大きくて静かで、乾燥機付きで乾かすところまで全自動でやってくれて……うらやましい。うちに持って帰ればさぞかし家事が捗ることだろう。
「すごいわ美奈江ちゃん、私その洗濯機使いこなすのに一ヶ月はかかったのに。あなたはもう使えるのね」
「いえ、こういうの前からほしいなーって思ってたのでよく家電売り場に行って説明書とか読んでて……あはは、なんかびんぼったらしくてごめんなさい」
「いいえ、こちらこそ気を使わせちゃってごめんなさいね。そうだわ美奈江ちゃん、お茶にしましょう」
「え、まだ来て五分も経ってませんよ！？」
「いいのよ、洗濯機動かしてる時間もお仕事の時間。私のお話に付き合うのもお仕事よ。うふふ、あなたが来るのが楽しみで、おいしいケーキも用意しておいたの」
「は、はぁ……」
　なんだか拍子抜けする感じもするが、これで日給三万円はおいしすぎる。というか逆に怪しすぎる気もする。でももしかすると家事手伝いは口実で、本当は話し相手が欲しいだけなのかもしれない。息子さんはなんだか気難しそうなイメージだけど、だからこそ寂しいのかもしれない。
「さ、おかけになって。お紅茶を淹れてくるわ」
　私は言葉に甘え、椅子に腰掛ける。
　料理は自分の仕事というのも、本当は誰かに食べてもらって、おいしいって言ってもらいたいから……とか。息子さん、おいしいとか一言も言わないんだろうなぁ。いや、偏見だけど。
「さ、召し上がって」
　差し出されたモンブランは本当においしそうだ。
「いただきます！」
　家が貧しいゆえに甘いものに飢えていた私は、何の疑いもせずほうばった。
「うわ、すっごくおいしいです！」
「そうでしょう？　このモンブランは絶品なの」
「おいしい……けど……あれ？　なんか……」
　眠い。なにこの眠気……。
「ごめんなさいね……ゆっくりおやすみになって……」
　最後に見えたのは、エツさんの悲しそうな顔だった。

　気が付くと私は床に寝ていた。
「ん……なにここ……」
　上半身をおこし見回してみると、そこはとても大きな部屋だった。ドアも窓もなく、完全な個室……というか密室になっている。ところどころに巨大な障害物があり、それは自分の身長よりもはるかに大きい。

「え、何これ、なんで私こんなところにいるの……エツさん！　どこ！？」
　大声を出してみるが、返事はない。
　ふと後ろを見て驚いた。真後ろにある障害物は、どう見ても椅子だった。私はとてつもなく大きな椅子の足元に座り込んでいた。遠くにはベッドも見える。
「やだ、何これ、ねぇ、エツさんってば！　助けて！　聞こえてるの！？」
　だがやはり返事はない。
　私は怖かったが、じっとしていても埒が明かない。勇気を出して立ち上がり、歩き出そうと足を一歩前に踏み出した瞬間、今まで巨大だった椅子は唐突に小さくなり、私は足で椅子を蹴飛ばしてしまった。
「きゃっ」
　私は椅子に躓き、再び座り込んでしまった。
　今度は部屋がとてつもなく小さくなっている。手を伸ばせば壁に届きそうだ。
「何なのこれ……やだ……お母さん……助けて……」
　泣きそうになっていたとき、突然天井が暗くなった。上を見上げてみると、そこには巨大な『眼』があった。
「ひっ」
　私はもはや声も出せず、ただひたすら巨大な眼を見ていた。凸レンズのようなものに写りこんだ、巨大な眼。それはときどき瞬きしながら、私をじっと見ている。それはバックベアード。昔弟が持っていた本で見た怪物。巨大な眼。災厄をもたらす眼。間違いなくあれは、エツさんの眼。
　そうか、私は騙されたんだ。騙されてあの怪物の観賞用コレクションのひとつにされてしまったんだわ。
　絶望は諦観を生み出し、私の心は妙に落ち着いていた。
　ここは棺ってことなのね。
　そして私は眠るように気を失った。

『本当に、ごめんなさい』
　絵津子は心の中で美奈江に謝った。
　絵津子は覗き穴のある『監視部屋』を離れ、廊下をはさんだ反対側の部屋へと入った。
「祐輔ちゃん、また新しい人に来てもらったわ」
　部屋の中には小太りの中年男性が白衣を着て座っている。
「そう、ありがとう、ママ。これでまた研究が進むよ。不思議の国のアリス症候群、これを人為的に作り出せたらきっと楽しいとママも思うよね？　ふふふ、ボク、いつかこれでノーベル賞とるからね」
「ええ、楽しみにしているわ……」
　絵津子は祐輔に言った。
　そのとき、不意に部屋にけたたましいアラーム音が鳴り響いた。

「……クソッ、なんでアラームが鳴るんだよ！　ババァ、てめぇが開けたんじゃねぇだろうな！？」
「ご、ごめんなさい……でも私はカギを持ってないわ……それより祐輔ちゃん、逃げられる前に早く追いかけないと！」
「……後で覚えておけよ！」
　祐輔はキーボックスに手をかざし、生体認証のロックを解除した。中から鍵の束を取り出し、廊下へ飛び出す。
　絵津子は考えていた。
　これまで何人もの人たちの精神を壊してきた。悪いことだとはわかっていながらも、祐輔ちゃんのため、しいては世界のためと思い続けてきた。でもやっぱり、間違っている。私も、祐輔も。やっと、決心がついた。
「もう……終わりにしましょう。終わらせましょう、祐輔ちゃん」
　誰もいない部屋で絵津子はつぶやく。
　じきに祐輔は、偽のアラームだったことに気づき、怒りながらここへ戻ってくるだろう。そのとき、全てが終わる。いや、終わらせるのだ。絶対に。
　絵津子はそっと目を閉じた。そして背中に構えた包丁を細く白い手で強く握り締め、大きく息を吸った。

神袋（題：『神』『紙袋』『病院』）

　地元の連れと花火大会に行った帰りにさ、俺んちで飲んでたんだよ。そしたらさ、なんかの拍子に誰かが「肝試ししよう」って言いだしたんだ。俺達も当時は幽霊とかそういうの全く信じてなかったから、単純に女子たちのキャーキャー喚く姿とか楽しいかと思って賛成したんだよ。
　Ａ介が「〇〇山病院跡地とかどうよ」って言うわけ。三階建てのちょっと大きめの病院だったけど、十年くらい前に隣町の総合病院と統合して、こっちは廃病 院になった。解体すらされてなくて、まさに肝試しにはもってこい。Ｂ子もＣ美も当然やだーこわいーとか言うけど、あれも本当に怖がってるんじゃなくて怖 がってる女子を演じてるんだろ。そんなノリだったから、みんなして俺の車でわいわい言いながら現地に向かった。
　参加者は俺以外には三人いて、とりあえずＡ介、Ｂ子、Ｃ美ってしとく。俺はＺにしとく。

　花火大会のあとだからこういうところ来る奴ら多いんじゃないかと思ってたけど、正門の前についたら俺らだけだった。門は閉じてたけど、そんな高い門じゃないから男二人は簡単に乗り越えた。ツタとか這ってたし錆びたりもしてたから女子は触りたくないとか言ってたけど、置いてくぞって言ったらすぐに乗り越えてきた。
　しばらく進むとさ、すぐに病院の入り口についたんだ。昔は大きな病院っていったらここしかなかったから何度も来たことあったけど、窓ガラスも割れて落書きもいっぱい。見るも無残な姿になってた。
　入れそうなところがないかと周囲を回ってたら、通用口を見つけたんで、俺たちはそこから中に入った。懐中電灯で照らすんだけど、スプレーで書かれた落書きばかりが目立って、なんか怖さ半減。
　ちょっとした物音とかでも女子たちが過剰に喚いてくれるから、まあ雰囲気は楽しめたんだけど、特に変わった現象も起こらず、そろそろ帰ろうかってことに。また通用口の方に戻ってたらさ、Ｂ子が突然立ち止まって、
「ねぇ……あんなところに地下にいく階段なんてあったっけ……？」
　って指差した。十年前までは何度か通ってたんだけど、俺もＡ介もＢ子も、誰も覚えがないって言うんだ。そしたらＡ介が「ちょっと行ってみようぜ」って言 いだした。俺もＢ子もついていくことにした。Ｃ美だけは「絶対良くない、早く帰ろう」って青い顔して言うんだけど、思えばそのとき帰るべきだった。

　階段を下りると短い廊下があって、手前にはエレベーターの昇降口が、奥には部屋が二つあった。夏だってのに空気が冷たかった。さっきまで聞こえてた虫の声も聞こえなくなって、あたりには四人の靴音しか聞こえない。
　さすがに怖くなってきて、四人で固まって動いてた。女子は俺たちの服の裾を掴んで後ろからついてきてた。
　突き当りの部屋は鍵がかかってて開かなかったんだけど、その右側の部屋は、観音開きのドア

を手前に引くと簡単に開いた。
「霊安室って書いてあるよ……」Ｃ美がつぶやく。
「はは、死体とかあるわけねぇじゃん」
　そういうとＡ介はちゅうちょなくドアノブを掴み、ドアを引いた。ギギギと軋む音が地下に響いき、ドアが開いた。
「やっぱり帰ろう！」
　Ｃ美が俺の裾を強く引っ張るが、俺はにやりとＣ美を見てから中に入った。正直いうと、このとき俺も少しビビッてた。なんせ空気があまりにも違う。真っ暗闇の部屋の奥から来る威圧感が半端なかった。
　Ａ介が懐中電灯を照らしながら中に入って行ったので、俺もあとに続いた。地下なので当然部屋には窓はなく、懐中電灯の明かりだけが頼りだ。
「あれ？　蝋燭の匂い？」Ｂ子がつぶやく。
　するとすぐに「うわっ」とＡ介が叫んだ。それに釣られて女子たちも悲鳴を上げた。
「な、なんだよ脅かすなよ」
「なあ、Ｚ、それ」
　Ａ介が懐中電灯で照らす先にあったのは、何かの祭壇のような場所だった。祭壇っていうと大げさだけど、神棚の大きくなったようなバージョン？　神社とかにありそうな、白い木で作られた立派な台だ。台の左右には燭台が建てられてあり、榊も飾ってある。
　そして中心には、熨斗袋（のしぶくろ）のような封筒が置いてあった。
「なんだこれ」
　そういいながらＡ介がその袋を手に取った。
　その熨斗袋の中央には一文字、『神』とだけ書いてある。
「神様へのお供え？　もしかして中にお金とか入ってんじゃないの？」
　Ｂ子が言った。
「え、まじ？」
　と言うや否や、Ａ介は間髪おかずに袋を開けて中を覗いた。
「何も入ってねーじゃん」
「普通こんなとこにお金を置いてるとかないし」
　Ｂ子が笑いながら言う。
　と、その時だった。
「……うううううぅぅぅ……」
　どこからともなく低い唸り声が聞こえてきた。
「やだ、な、何！？　早く帰ろ！」Ｃ美が俺の袖をつかみ、強引に外に出ようとした。
「と、とりあえず誰か来たのかもしれないし、外に出よう！」
　俺も半ばパニックになりかけながら、二人に声をかけて部屋を出た。Ｃ美に引きずられるように階段を上り、通用口からは全員で猛ダッシュで自動車のところまで逃げ帰った。
「はぁ、はぁ、あ、あれ、Ａ介は！？」

　Ｂ子の声に振り替えるとＡ介の姿が見えない。
「や、やだ、冗談やめてよ！　Ａ介君、どこ！？」
　Ｃ美が叫ぶ。
「と、とりあえず待ってみようぜ」
　と車の中で数分待ってみたけど帰ってこない。
　すると突然俺の携帯が鳴った。うちの母親からだった。なんでこんな時間に？　いぶかしく思いながらも出てみると、突然怒鳴られた。
「あんた、今どこ」
「え、と、友達と肝試し来てんだけど」
「今あんたたちが夢に出てきたんよ。何かあったでしょ、正直に言いなさい」
　何でわかるのか不思議に思いながらも、俺は〇〇山病院に行ったことや変な祭壇があったこと、Ａ介が帰ってこないことを話した。
「馬鹿！　なんでそんな怪しい物に触るのよ！　あんたたち、すぐにここに帰ってきなさい！　他の二人も一緒に！　Ａ介君のご両親にはこっちから連絡しとくから！」
　とりあえず霊安室まで戻る気にも到底なれないので、俺たちは家に戻ることにした。

　社内では終始無言だった。Ａ介君を置いていくのかとＢ子が聞くが、とりあえず救出準備をしようと適当に誤魔化して走り出した。正直、理由なんてどうでもよかったと思う。とにかくその場所を離れたかった。
　自宅前まで来ると、玄関前に母親が立っていた。車を前に止めると、すぐさま乗り込んできた。
「△△神社まですぐに向かって」
「え？」
「いいから早く！」
　俺はわけもわからず△△神社へ車を出した。△△神社は車で数分のところにあって、初詣でいつも行くところだ。神主さんとも顔なじみで、懇意にさせてもらってる。
　神社の駐車場に車を止めて社務所に向かうと、神主さんが立って待ってた。
「厄介なことになったのぅ。年寄りに無茶をさせんでくれ」
「本当に申し訳ありません」
　母親が頭を下げ、俺たちも意味も分からず頭を下げる。
　そもそも、一体何が厄介なのかがこの時点ではまだ理解できていなかったが、俺たちは案内されるままに本殿の方に向かった。
「とりあえずここにおれ」
　不安に駆られながら、三人とも一言もしゃべらずに小一時間ほど待ってた。神主さんの奥さんが温かいお茶を出してくれて、それで少しほっとした。すると遠くで自動車が止まる音がした。しばらくすると、父親と弟に抱えられたＡ介が本殿に入ってきた。Ａ介の母親は涙を吹きながら横についている。

「Ａ介！」
　俺は呼びかけたが返事はなかった。Ａ介の目は白目をむいており、口は半開きでよだれがぽたぽたと落ちている。
「これじゃ」
　神主さんが紙を手に持ち、俺らに見せた。例の『神』と書かれた熨斗袋だった。
「あ」
「お前たち、これを開いたのか？」
「Ａ介が開きました」
「中は見たか？」
「いえ、中を見たのもＡ介だけかと」
　Ｂ子もＣ美もうなずく。
「そうか、ならお前たちは何とかなりそうじゃな。Ａ介は……まあ頑張ってはみるが……」
　神主さんは口を濁してしまった。
　それからＡ介と神主さんは奥に行き、数分後にまた戻ってきた。
「あの……Ａ介君は大丈夫ですか？」Ｃ美が尋ねた。
「なんとも言えんが、数か月で治ればええが、下手すりゃ一生……」
　俺たちは絶句した。さっきまであんなに元気だった奴が、一体なんでこんなことに……。
「あの袋、『神』と書いてあったじゃろ。あれはおそらく、厄払いの後の憑代（よりしろ）じゃ」
「よりしろ？」Ｂ子が聞く。
「憑代というのは、死んだ人なんかを一時的に現世に呼び戻すための、ニセモノの体ってことじゃ。しかしあれには『神』と書かれてあった。つまりあれは『神降ろし』のための憑代ということになる。あの袋の中には神が降ろされていたやもしれんということだ」
「え、でも神様が降ろされてたんならいいんじゃ……」
「厄払いと言ったじゃろ。神様と言ってもいい神様ばかりじゃないぞ。貧乏神や疫病神、祟り神まで神様じゃ」
「祟り神……」
「そんな神が封じられたものに、Ａ介は晒されてしまったわけじゃ。わしの手に負えるかどうか……。とりあえずお前たちは特に影響はないと思うが、念のため のお祓いじゃ。二度とああいうところに行くんじゃないぞ。それにしても不思議なのは、降ろされた神がなぜそのまま放置されてたかじゃな。普通憑代ってもん は、何らかの目的を達成したあとは水に流したり燃やしたりするもんなんじゃがな」
　そういうと神主さんは御神体の鏡の方に向いて、拍子を打った。

　あれから数か月経つが、お祓いのおかげかどうか、俺たち三人には今のところ何の影響もでていない。
　Ａ介は未だにあの状態のままだった。大学は休学扱い。精神はアレだけど、特に暴れるわけで

もないので入院はせず、自宅での介抱が続いているらしい。Ａ介 の両親には俺たちは恨まれてるせいで、お見舞いもさせてくれない。まああんな姿を見せたくないってことかもしれないけど。

　ところでさ、冷静になり少し思い出したことがあるんだ。例のあの部屋で、俺たちは祭壇に目をとられた。でも入ってすぐ、Ｂ子は蝋燭の匂いに気づいた。てっきり霊安室に染みついた匂いなんだと思ったが、考えたらさ、霊安室って普通『線香』の匂いがするもんじゃね……？

　……あともう一つ。あの場所になんで榊が『枯れずに』置いてあったのか。太陽が全く当たらない場所にあったってのに、あそこには青々とした榊が挿して あった。ってことはもしかしてさ、俺たち……神降ろしの儀式の最中にあの部屋に入ったんじゃ……？　それなら憑代がそのまま放置されていたわけも、蝋燭の 匂いが残ってたわけも、新鮮な榊が置いてあったわけも、全部納得いくんだよ。で、俺たちが霊安室に入ったとき、あの部屋の中にはその儀式をやっていた人物がいたということ……。Ａ介がこんなことになったのも、全てそいつのせいだとしたら。

　ただ、あのとき聞いた低い唸り声。あれは部屋の中にいた人間が出せるような声じゃなと思うんだよね……。それにどの道、俺たちに成せることはもう何もな い。Ａ介をこんな植物状態にしたのが『忌むべき神』だったんだとしたら、対抗できる術なんてなおさらあるわけがない。あの場所で起こった不合理を、俺たち は受け入れて生きていくしかないんだろう。

とある勇者の大冒険（題：『勇者』『猫』『病院』）

「え？　あそこに行ってきたらブタイにいれてくれるの？」
「ああ、中まで入ることができたらいれてやるぜ。ま、俺らの中じゃまだ誰も成功してねぇけどな」
　ボクは遠くに見える白い建物を見た。そこはとても大きく、とても広い。入り口までいくだけでも大変だ。「わかった、やってみるよ！」
　生まれたときから体が小さかったボクは、仲間たちの『ブタイ』というやつにいれてもらえなかった。そんなボクにやってきた最大のチャンスだ。ボクは気を引き締め、白い建物へとかけだした。

「え、お前マジであそこいってきたのかよ！　マジ勇者じゃん、勇者！」
　ボクは仲間たちの前で自慢げに立ち上がる。今日はいつもとは違う。いつもみたいな見下したような目じゃなく、明らかに『センボウ』のまなざしってやつだ。みんながボクの話を聞きたがっている。それだけでなんだかうれしい。
「ふふ、ボクには何てことなかったね。でも、みんなはやめといたほうがいいと思うよ。目の前に立ち尽くす門番の目をかいくぐって、透明なギロチンを抜けると、そこはひんやりとした空気が張り詰めていた」
「すげぇな！」仲間たちはじっとボクのほうを見ている。こんなに見られるとちょっと恥ずかしいな。
「それでね、中には白色や桃色の服を着た人間がいっぱいいて、ボクを見つけるなり悲鳴を上げたんだ。そう、ヤツらはボクのことを見て怖がったんだよ！」
　仲間たちから歓声が上がった。
「よし、約束どおり、お前は今日から部隊の一員だ。おい、俺の背中に乗れ、アジトを教えてやる！」
　ボクはブタイチョーの背中にぴょんと飛び乗り、振り落とされないように耳をつかんだ。
「おい、いてぇよ、耳はやめろ。持つなら首んとこの毛を持て！」
「うん、ごめん」
「うんじゃねぇ、部隊では『ラジャー』と言え！」
「ラジャー！」
　ボクは両手で黒い毛の束をがっしりと掴み、誇らしげにしっぽをピンと立てた。

「先生……ネコイラズでもまいておきましょうか」
「いや、本格的にネズミ駆除会社に頼んだほうがいい。どんな病原菌を持ち込まれたかわからんからな。衛生に金を出し惜しんではいけない。それに病院にネズミが入ったことが広まる前にこれでもかってくらいに対策をとっておかなくては、信用問題にもなりかねないからな」
「わかりました。そういえば先日はネズミじゃなくて黒猫が玄関の前にいましてね、患者さんた

ちからは不吉だって声もあがって……」

三題噺集

http://p.booklog.jp/book/13138

著者：森野クマ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/wiwiroon/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/13138

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/13138

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ